

グローバルランゲージスペースの過去・現在・未来 ー課外国際共修と内なる国際化ー

畝田谷 桂子

キーワード：課外国際共修、内なる国際化、グローバルランゲージスペース、
グロスぺ外国語、グローバル人材育成郷中教育

概要

本稿では、全学生を対象に課外国際共修を含む活動を行っているグローバルランゲージスペースの目的、設置後9年間の活動取組について紹介・総括し、成果と課題について考察した。多数の参加学生を得て、グローバルコンピテンス育成に関する事柄への関心を高める機会を広く提供できたことが成果である。加えて、その活動理念である「内なる国際化」(Internationalization at Home) について概説し、課外国際共修の教育的意義を確認した。さらに、正課・課外国際共修の意義と可能性、「内なる国際化」と大学国際化の関連について確認、考察した。

I. はじめに

鹿児島大学は、教育目標の1つに「グローバルな視野をもち、国際社会の発展に貢献できる実践的な能力を育む」を掲げている¹。これを具現化する一つの方法として、グローバルセンターは「鹿児島大学進取の精神グローバル人材²育成双方向プログラム (以下 P-SEG Interactive)」を企画・運営している。P-SEG Interactive は、グローバルセンターが企画実施する様々な国際的な体験学修とともに、全学の学生が様々な在籍段階で選択できる学内外の国際的な体験学修機会を入学から卒業(修了)まで段階的にロードマップとして繋いで、学生が継続的かつ双方向の学びによってグローバル人材へと成長することを目的にしている。グローバルランゲージスペース(以下、グロスぺ)は、このP-SEG Interactiveの活動の一つとして、全学生を対象に学習交流プラザを拠点に実施している課外国際共修を含む活動であり、筆者はグロスぺの設置・企画・運営を担当してきた。

本稿では、2022年度で9年目を迎えたグロスぺについて、その目的、活動の種類について紹介し、これまでの取組を総括して成果と課題について考察する。また、グロスぺの活動理念である「内なる国際化」(Internationalization at Home) を概説し、課外国際共修の「内なる国際化」における教育的意義を確認する。さらに、今後に向けて正課・課外国際共修の意義と可能性、及び「内なる国際化」と大学国際化の推進について考察したい。

II. グロスぺの設置、目的、活動の種類

1. 設置の経緯と活動場所

グロスぺは、2014年度に留学生センター(2016年度グローバルセンターに改組)によって企画・開始された。改組後のグローバルセンターでは、学生海外派遣部門が企画・運営を担い、外国人留学生部門から外国人留学生へ活動参加を呼びかける協力を得ている。学習交流プラザ2階東側の大壁面を海外活動に関する情報掲示用使用する大学許可を得て³、その近辺を課外国際共修(グロスぺ外国語等)のグループ活動の実施拠点としてきた。多くの学生が気軽に集い、Wi-Fi

¹ 鹿児島大学ホームページ <https://www.kagoshima-u.ac.jp/education/> 教育目標 .pdf

² 狭義に経済発展を支える人的資本ではなく、グローバル社会に必要なコンピテンスを備えた人材を指す。

³ 平成25年度第11回学生生活委員会(平成26(2014)年3月10日)了承

も飲食も可能で様々な学びの形を創出できる学習交流プラザの特徴を最大限に活用していたが、2020年度からコロナ禍により対面活動をオンラインに変更し、2022年11月現在も、この場所を活用した活動は休止している。グロスぺ外国語等で行う、90分間継続する近距離対話活動（時に飲食を伴う）が可能になり次第、同プラザでの活動再開が望まれる。

2. 目的

グロスぺは、以下の目的⁴で設置した。

① グローバルな活動に関する情報を集約・明示し、学びの提供で学生の関心を集める：

全学の学生を対象に、学内に散逸しているグローバルコンピテンス⁵育成につながる学内外の関連情報を集約して掲示・見える化し、関連する多様な形の学びの機会・イベント・サービス等を日常的に継続して提供し、グローバルな学びに広く学生の関心を集める。

② 文化的多様性の体験：

教育活動・イベント・サービス等で、国内学生⁶・外国人留学生・所属学部や在籍段階等、「異なる者」に個人として出会う体験、人的ネットワークを拡げる機会を提供する。

③ 主体的かつ自治的に、協働して学ぶ：

グローバル社会では日常となる「異なる者」と互いに学び合うメリットを活用する「グローバル人材育成郷中教育⁷」を目指し、「グローバル人材に求められる能力や資質像」を共に学び考え、「求められる能力や資質を獲得する方法」について情報を収集し、「能力や資質を獲得する計画」を立てること、さらに自己の「計画を実現」することに役立てる。また、コミュニケーションに必要な外国語を練習する場としても、グロスぺを役立てる。

3. 活動の種類

これまで行ってきた活動を表1に簡潔に整理し、次章で各活動の総括を行う。

表1 グロスぺの具体的な活動

活動番号	名称	目的※1	活動内容	参加者・対象者		
				留学前 国内学生	留学後 国内学生	外国人 留学生
1	グロスぺ外国語	①②③	外国人留学生1名（母語又は英語）と当該言語を希望する国内学生3-4名の固定グループを作り、90分/週/学期（10回以上）外国語学習を核とした学習を行う。	○	人数制限のため遠慮頂く	◎※2
2	外国語 Speaking Lunch Table	①②③	学術交流協定校派遣留学帰国生を核として、留学先の言語や情報を昼食を取りながら話す。参加自由で、外国人留学生、留学に興味のある学生が主な対象。少数の外国人研究者、市民の参加も見られた。	○	◎	○
3	伝えよう！私の海外体験	①②③	学術交流協定校派遣留学帰国生を主とした留学体験報告会。発表後のパワーポイントによる原稿を編集して、大学HP「伝えよう！鹿大生の海外体験」に掲載している。	○	◎	○
4	International Quiz Night と日本伝統芸能の紹介-日本舞踊-	①②	「International Quiz Night」：国内学生と外国人留学生の混成グループで競う英語による雑学クイズ大会。 「日本伝統芸能の紹介-日本舞踊-」：専門家による日本舞踊の英語説明と実演鑑賞、指導を受けて舞踊体験もする会。	○	○	○
5	留学相談	①	グロスぺ担当特任専門員、担当教員等による定期開催の個別留学相談。	○	※3	※3
6	海外活動情報掲示、提供	①	学習交流プラザ2階東側大壁面における関連情報と海外研修報告ポスターの掲示。P-SEG登録者へのメールによる配信、学務Webを通じた配信。	○	○	○
7	グローバル人材への啓発イベント	①②③	「Tea Time with Ms. Varhegyi」：異文化セミナー講師を囲む茶話会の主催。 「ホンモノ留学のスズメ」：トビタテ！留学 JAPAN、協定校派遣留学帰国生等による学生自主企画の共催。	○	○	○

※1 「II-2. 目的」の①-③を指す。※2 ◎=当該活動で主導的役割を果たす者。※3 これらの学生を紹介して繋ぐこともある。

⁴ グロスぺホームページ <https://gls.gic.kagoshima-u.ac.jp/concept/>

⁵ 本稿では以下の定義を用いる。「グローバルコンピテンスは、多次元に関わる能力である。この能力を備える人材は、地域や地球全体、異文化間で生じる課題をよく観察して調べ、異なるものの見方や世界観を理解してそれらの価値を認め、他者を尊重してうまくコミュニケーションをとり、持続可能性と世界の人々全体の心身の健康保持に向けて責任ある行動を起こすことができる」（OECD 2019, p.4）（筆者訳）

⁶ 本稿では、学生のルーツや文化的背景等の多様化を鑑み、従来の「日本人学生」の表記を「国内学生」に改めた。

⁷ 「薩摩藩では、地域の年齢階梯制の青年の自治的集団による修養教育が行われてきた。この地域の年齢階梯制の組織による人育てが、郷中教育である。郷中教育は武士の若者組の教育機能をもってきたのである。」（神田2009, pp.125-145）

Ⅲ. 各活動の総括

1. グロスペ外国語

(1) 活動のまとめ

2014年度から現在まで、外国人留学生と国内学生が個として出会い、共に学びながら交流する機会を提供している。外国人留学生1名に国内学生4名までの学期単位の登録制固定グループを作り、授業時限に合わせた1回90分、週1回1学期10-12回、留学生の母語と文化（または運用可能な言語）の学習や運用を核とした活動を組織した（コロナ禍で2020年度前期休止、以後Zoomで活動）。参加者数はコロナ禍前まで増加し、2021年度までに1742名の参加者があった（表2）。2016-2021年度の学部別参加人数割合は、法文学部が最多の47%を占めている（図1）。また、言語種別の参加者数割合は、英語が60%強、続いて韓国語、中国語であった（表3）。その他の言語種は、時々の在籍留学生によって変化する（表4）。コロナ禍前は、独語と仏語が継続していたが、コロナ禍で新規留学生が途絶え、2020-2021年度はベトナム語とマレー語のみとなったため、韓国語と中国語の参加者割合が増加した。

表2 参加者数とグループ数

年度	参加者数 実人数(名)* i	内訳		グループ* ii
		外国人留学生	国内学生	
2021	126	23	103	35
2020	61*iii	9	52	16
2019	382	63	319	77
2018	267	58	209	65
2017	289	52	237	60
2016	245	48	197	53
2015	247	34	213	53
2014	125*iv	27	98	28
総計	1742	314	1428	387

* i 学期ごとに集計した実人数。

* ii 留学生1名が複数グループを担当することもある。

* iii 2020年度は前期休止、後期のみ開催。

* iv 2014年度前期は各グループ4回の実施。以後は各グループ1学期10-12回実施した。

学部別参加人数 2016-2021年度 参加者総数1182名

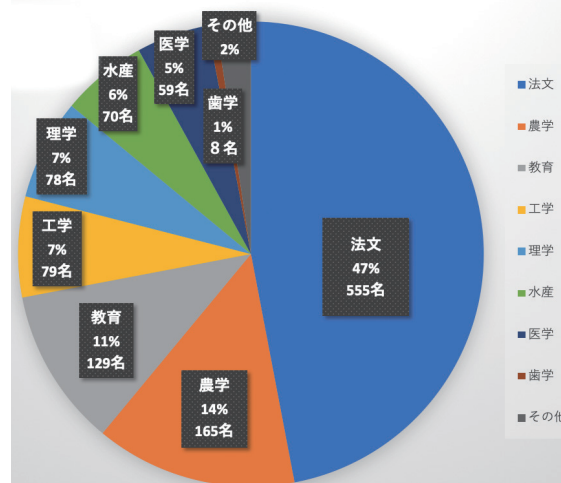


図1 学部別参加人数と割合

表3 言語種別の参加者数割合

言語種	2016-2021 年度 %	2016-2019 年度	2020-2021年 度コロナ禍
英語	62.4	62.4	62.3
韓国語	13.64	12	19
中国語	9	7	14
その他	14.8	18.6	4.7
総計 %	99.84	100	100

表4 その他の言語種実施学期数

言語	ドイツ	フランス	スペイン	インドネシア	ポルトガル	タイ	イタリア	トルコ	ベトナム	マレー
2016-2021 年度 実施学期数	8	8	7	5	4	4	2	1	2	3



活動の様子

(2) 成果と課題

グロス最大規模の活動で、国内学生、外国人留学生双方の多くに個としての交流と学習機会を与え、国内学生には正課にない複数の言語と文化の学習機会にもなった。毎学期終了後に実施しているアンケートでは、「参加してよかった」が常に95%を超えている。外国人留学生が参加して得たものの主要回答は、「日本人と話すことの慣れ」46.2%⁸、「日本人学生との友人関係」43.6%⁹、他に「異文化を学んだ」「教え方と各学生の異なりの発見」等があり、国内学生は「話す機会、発音、聞き取り」と「文化」が多く、他に「他学部生、留学生との交流」「授業科目にない外国語の学習」「発言への抵抗感の薄れ」「学習動機の向上」等があった。この活動を契機に協定校に留学し、留学先で帰国外国人留学生と交流する例も複数あり、本活動が表1の目的①②③に沿って効果を上げていると考えられる。

課題は、まず、アンケートから学生同士の対等な関係でなく外国語を教える教師と学生の関係になるグループが見られることで、活動意義と共修の目的を説明する介入がさらに必要なことである。グループ構成が、例えば博士課程留学生と学部低学年の国内学生等であると上記関係になりやすいと分析している。また、アンケートの要望から1限を排除し、語学能力を考慮したグループ分けに改善したがばらつきが残ること、コロナ禍収束後に学生数が復活すると運営職員の労力がさらに必要になることである。

2. 外国語 Speaking Lunch Table

(1) 活動のまとめ

学術交流協定校派遣留学帰国生（以後、派遣留学帰国生）の「派遣先言語を使う機会がない」という声に対応して、2016年度後期から2019年度まで（2020年度以降コロナ禍で休止中）派遣留学帰国生をリーダーとして、学習交流プラザで昼食をとりながら誰でも出入り自由に参加できる活動を企画した（表5）。外国人留学生に呼びかけて当該言語で話したり、当該言語圏の留学に興味のある後輩学生への情報提供も目的としたが、少数ながら教員、外国人研究者、市民の参加もあった。

(2) 成果と課題

活動後のアンケートでは、リーダーとなった全員が取組継続の意義があると回答し、語学力維持、他学部他学年の学生や留学生との繋がり、特に留学生の悩み相談に乗ったこと等の異文化交流、留学情報を提供し渡航した後輩が出たことなどの記載があり、目的が達成できたと言える。すなわち、派遣留学帰国生の語学力維持の要望を現状で可能な方法で満たし、留学前中後の郷中教育で外国人留学生と後輩につなぐ人的ネットワーク形成ができたこと、彼らが留学にあたって受けた助けや自己の学びを長い目で他者に還元する‘Pay it forward（恩送り）’を実践を通して自覚できたこと、少数ながら学生以外の参加者を得たことが成果である。課題は、昼食時に毎回予測不能な人数が集まるため、昼食をとる他の学生と競合してテーブルの確保が困難なことである。

表5 参加者数と言語種

年度	参加者数 延べ数(名)	学期	言語種別のテーブル
2019	1668	前期	英、仏、独、中、韓国語
		後期	英、仏、独、中、韓、スウェーデン語
2018	927	前期	英、独、中、韓、インドネシア語
		後期	英、仏、独、中国語
2017	998	前期	英、仏、独、スペイン語
		後期	英、仏、インドネシア語
2016	322	後期	英、仏、中、スペイン語
総計	3915		



活動の様子

⁸ この%は、2017年度後期アンケート回答で計算した。「日本人」の表記は、アンケートの引用による。

⁹ 同上。

3. 「伝えよう！私の海外体験」

(1) 活動のまとめ

派遣留学帰国生を主とした留学報告会を、海外留学情報周知と留学人脈形成のため、2014年度後期から2020年度まで（2022年11月現在、コロナ禍の留学延期／停止の影響で休止中）平日6限に一般公開で定期開催した（表6）。各回報告者は2-4名程度とし、報告者と参加者の距離が近い小さい部屋で情報収集しやすくした。その後発表スライドを「伝えよう！鹿大生の海外体験」ホームページ¹⁰に掲載、公開している。

(2) 成果と課題

発表は、留学帰国生が留学成果を熟考し、他者にわかりやすく伝える技術を磨く教育的効果がある。また、多数の留学帰国生が一堂に会する報告発表会ではなく、各発表者の報告をじっくり聞けるマラソン形式の小さい会にしたことで、各回参加者は少ないが、利点として留年や就職への影響、必要経費等、気になる情報が報告者に聞きやすく、その場で留学人脈形成が容易だったことが挙げられる。一方、課題として、大きい報告発表会と比して、会の認知度が特に教職員に低いこと、開催が頻繁で全学生向け学務 Web 送信が利用できないため、P-SEG 登録者以外の学生への開催情報周知に工夫の余地があることである。

図2 報告会ポスター

図3 報告会予定ポスター

図4 ホームページ

表6 参加者数

年度	回	発表者数(名)	参加者数(名)***
2020*	第57回	1	Zoom開催で未集計
2019	第47-56回	26	132
2018	第41-46回	17	103
2017	第30-40回	40	175
2016	第18-29回	34	215
2015	第3-17回	44	243
2014**	第1-2回	2	43
総計		163	911

*2020年度はZoom開催 ** 2014後期から開始。
***発表者を含む

¹⁰ グローバルセンター学生海外派遣部門ホームページ「伝えよう！鹿大生の海外体験」<https://report.gic.kagoshima-u.ac.jp>

4. International Quiz Night、日本伝統芸能の紹介－日本舞踊－

4-1. 「International Quiz Night」

(1) 活動のまとめ

国内学生と外国人留学生の接点を設けようと、グロスぺ担当教職員がファシリテートする楽しいイベントを企画実施した。外国人留学生と国内学生でイベント当日混成グループを作り、グループで回答を相談してグロスぺ担当の特任専門員が作成した英語による雑学トピック Quiz に挑戦する交流イベントを2014年度から2018年度まで年2回実施した（2014年度は年1回）。

(2) 成果と課題

単発のゲームイベントであっても、授業とは異なる気軽な雰囲気の中で国内学生と外国人留学生が出会う機会、並びにグループ内での協働体験の提供は一定程度果たせた。課題は、国内学生と外国人留学生の参加者数のバランスを取ること（5年間の総参加人数では均衡しているが、不均衡な回もあった）、また、グロスぺ担当教員の業務増加（2018年度から大学の世界展開力強化事業が開始したこと等）

と特任専門員ポストの消滅により、2019年度以降開催できなくなったことである。

表7 開催日と参加者数

年度	開催日	参加者数(名)	内訳(名)
2018	7月19日	22	留学生9, 国内学生9, 教職員4
	12月19日	15	留学生9, 国内学生3, 教職員3
2017	7月4日	39	留学生17, 国内学生20, 教職員2
	12月12日	27	留学生17, 国内学生8, 教職員2
2016	7月15日	23	留学生15, 国内学生3, 教職員5
	12月20日	54	留学生7, 国内学生41, 教職員6
2015	6月29日	42	留学生15, 国内学生23, 教職員4
	12月22日	39	留学生20, 国内学生10, 教職員9
2014	11月5日	21	留学生14, 国内学生4, 教職員3
総計		282	留学生123, 国内学生121, 教職員38

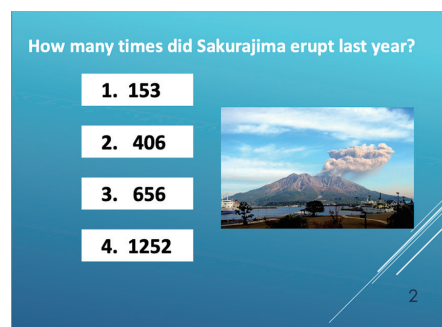


図5 クイズスライドの実例



グループ対抗戦で回答を考える様子



4-2. 「日本伝統芸能の紹介－日本舞踊－」

(1) 活動のまとめ

海外体験や留学に興味のある国内学生、外国人留学生を対象に、2014年度から2017年度まで年1回、鹿児島を拠点として活動する国際文化交流会 TEN¹¹代表の烏野ユリ子氏（吾妻流千光会会主、吾妻千海）とその門下生による、日本舞踊を通じた体験型の日本文化理解の機会を設けた。日本舞踊の英語による概略説明、実演鑑賞と各演目の英語解説、踊りの体験講習、TENの理念と活動の英語紹介からなる。国内学生は、自らに関係のある伝統文化を海外で適切に紹介するという新しい視点で見るときっかけにすること、外国人留学生は、日本舞踊を直接鑑賞し体験することにより日本の伝統芸能に対する理解を深めることを目的とした。

¹¹ 『『真の意味で日本を理解してもらうためには国境を越えた文化の交流が重要なポイント』という理念のもとに、文化を通じて、全世界と交流を行うことによって、国際相互理解の促進と地域の国際的・文化的発展に寄与するために1985年に組織された団体。現在のメンバーは、約160名。陶芸・いけ花・箏曲・茶道・切り絵・空手・染色・太極拳・書道・日本舞踊などの専門家や愛好家、及びホストファミリーの希望者で構成されている』TEN ホームページ http://www.7b.biglobe.ne.jp/icea-ten853/html/j_what_ten.html

(2) 成果と課題

地域の国際交流団体の活動について直接話を聞く機会、外国人留学生・国内学生ともにあまり馴染みのない日本舞踊を公演時の舞台衣装と化粧で間近で鑑賞し、指導を受けて実際に踊りを体験したこと、日本舞踊の概略説明を英語で受けたことは、貴重な体験であった。課題は、烏野ユリ子氏の協力は継続して得られる環境にありながら、グロスぺ担当教員の上述の業務増加により2018年度以降開催できなくなったことである。

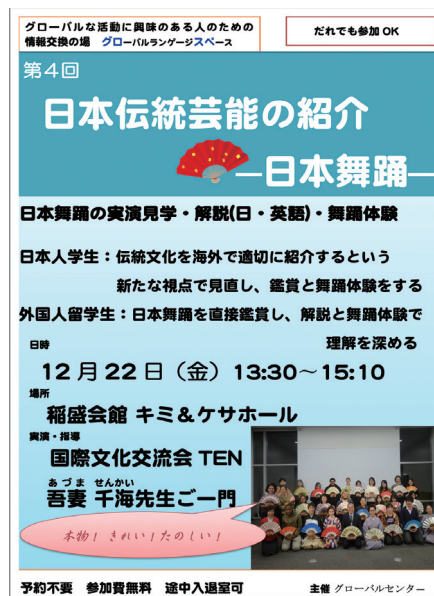


図6 案内ポスター

表8 開催日と参加者数

年度	開催日	参加者数(名)	内訳(名)
2017	12月22日	19	留学生5, 国内学生6, 教職員6, 市民2
2016	12月15日	50	留学生33, 国内学生10, 教職員7
2015	12月16日	30	留学生15, 国内学生1, 教職員14
2014	12月19日	33	留学生15, 国内学生8, 教職員10
	総計	132	留学生68, 国内学生25, 教職員37, 市民2

5. 留学相談

(1) 活動のまとめ

2014年度後期から2018年度まで、留学を身近なものとするために海外活動について気軽に何でも相談できる個別留学相談の場を、活動の見える化も意識して、学習交流プラザのガラス張りの学習室2で毎週火曜2時間、定期的で開催した。当初は予約不要であったが、相談者の待ち時間解消のため初回訪問時に予約できる制度にするなど効率化を図った。2016年度は、「グローバル人材育成郷中教育」としてトビタテ!留学 JAPAN や派遣留学帰国生等が複数名相談に加わり、学生の多く利用する学習交流プラザで、楽しい雰囲気複数の相談が同時進行できる形になった。2019年度から相談の主担当であった特任専門員ポストが消滅したことから、グロスぺ企画による学習交流プラザでの定期開催の留学相談日は終了した。しかし、留学相談は欠かせないため、その後は完全事前予約制で、国際事業課留学生係(協定校派遣、トビタテ!留学 JAPAN 等の大学を通して応募する留学情報提供)と学生海外派遣部門教員(その他基本的な情報提供と指導助言)が対応する体制で継続している。

(2) 成果と課題

2019年度から、留学帰国生も参加した定期開催の相談の場がなくなったが、留学に興味のある学生に留学帰国生が積極的に関与してくれる機運ができたことは成果と言える。就活への影響まで含め、学生の目線で臨場感のある情報交換ができ、意味のある繋がりである。しかしながら、2020年年初からのコロナ禍により、そのサイクルが絶たれてしまった。2022年度になって留学帰国生が7名出たが、留学開始を1学期から1年半延期した影響で帰国後全員が休学し、学内に留学帰国生がいない状況である(2022年11月現在)。以前のサイクルを維持するため、留学中の学生とキャンパスをZoomで繋いだ説明会を実施したり、派遣留学学内選考通過生に卒業(修了)した留学帰国生を紹介して対応しており、時間がかかるが、これは修復可能な課題といえる。一

方、学生が対応する相談とは別に、教職員が対応する相談は必須である。留学相談には関連情報の最新の正確な知識が必要であり、学生の漠とした関心を、適切な情報（または情報ソース）を提供しつつ自己分析を促しながら導いていく相談は、複数回に及び大変時間がかかる。現状の有限な人員でどこまで裾野を広げるのか、すなわち上述の漠とした段階の相談を範囲外とし、目的が明確な学生のみを対象としたテクニカルな情報提供とするのか、どこまで深く指導するのかを選択し、制限をかけなければならないことが真の課題である。

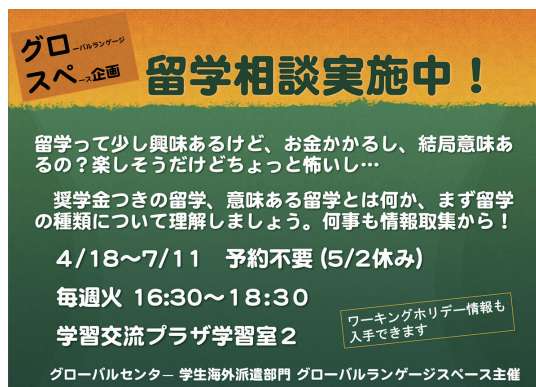


図7 案内ポスター

表9 学習交流プラザでの定期留学相談の状況

年度	相談者数(名)	回数など	内訳(名)
2018	34	20回	34
2017	36	回数不明	36
2016	65	後期 (10/4~1/31)	25
		前期 (5/19~7/14)	40
2015	105*	後期 (12/4~3/18)	105
2014	37	後期 (11/18~3/17)	37
総計	277		277

※ 学生による相談対応は含まない。*延べ数

6. 海外活動情報揭示・提供

(1) 活動のまとめ

コロナ禍前の2019年度までは、学習交流プラザ2階東側の大壁面を海外活動に関する集約的な情報掲示板として使用し、併せて海外研修報告会で参加学生が作成した研修ごとのまとめ発表ポスターも掲示していた。学習交流プラザは昼食を取れるスペースと学習スペースが一体となっているため人流も多く、グロスぺの活動拠点としていたことも加えて国際交流に関心のある学生の集う場所として掲示効果があった。しかしながら、2020年度から現在（2022年11月）まで、近距離長時間の対話活動の制限から当該掲示板近辺を拠点としていたグロスぺ外国語はオンライン活動に変更、昼食時の外国語 Speaking Lunch Table は休止状態となって学生が当該の場所に集う理由がなくなった。人流は、キャンパス全体も学習交流プラザもコロナ禍前と比較して減少したままである。国際交流教育に関する情報そのものも減少して旧来型の掲示板の意味は縮小し、2020年度からは代替方法として、重要な情報のみ Web（P-SEG Interactive 全体の情報周知手段であるメーリングリストや Facebook、インスタグラム、学務 Web 等）で送信している。

(2) 成果と課題

グロスぺ活動の周知に当たり、ランドマークとして大掲示板に「Welcome to the Global Language Space」と掲げ、目に見える活動拠点を設けた意義は大きく、グロスぺの活動拠点として、また学生の集う場所として機能した。コロナ禍を経て、その集いの片鱗は無くなっているが、2023年度以降状況が改善され次第、同プラザでの活動再開と学生の集まりが望まれる。情報伝達法は Web へと進化しても、集いの拠点の見える化は意味が大きく、今後の対面活動再開に当たって掲示板を存続して活用を再度軌道に乗せることが課題である。



グローバルランゲージスペース掲示板

7. グローバル人材への啓発イベント

7-1. 「Tea Time with Ms. Varhegyi」

(1) 活動のまとめ

これは、グロスぺ活動番号7（表1）の活動モデルとして、グロスぺ設置直前に学習交流プラザでデモイベントとして実施した。留学生センター（当時）がフランスから講師を招いて開催した「異文化適応ワークショップ」（国内学生、外国人留学生、教職員対象。2014年3/5-7）のVarhegyi講師を囲み、ワークショップ参加者を主とした自由な雰囲気の花話会“Tea Time with Ms. Varhegyi”を設け、交流及び情報交換を行った（3/7、参加人数33名：国内学生9名、外国人留学生8名、教員7名、職員9名）。

(2) 成果と課題

参加者及び講師との自由な会話を通じ、グローバルを触媒に、異なる人々の出会いを創出して自然な化学反応を起こす機会とする、という活動モデルを具象化して例示できた。国内学生と外国人留学生の英語による交流が生まれたほか、外国人教員と国内学生の交流も見られ、外国生活、留学情報等の情報交換や、特定国に留学を目指す国内学生が、当該国出身教員に情報提供を得る繋がりもできた。さらに、留学生センター（当時）と共通教育外国語部門の英語教員との情報交換ができ、インフォーマルではあるが、互いの学生を動員する方策について話すことができた。課題は、このモデル提示後に続けて企画していた構想（Brown Bag Lunch Meeting: 学内の教員に、気軽に昼食を取りながら専門分野の国際体験について話して頂く企画）が、企画担当教員の業務増加で全く実現できなかったことである。

7-2. 「ホンモノ留学のススメ～企業が求めるグローバル人材とは～」

(1) 活動のまとめ

これは、グロスぺの目的「③主体的かつ自治的に、協働して学ぶ」（グローバル人材育成郷中教育）の初回の具体例である。トビタテ！留学 JAPAN 第2期生が帰国後に再興した海外研究会（大学公認団体）とグロスぺが共催し、複数の派遣留学帰国生も企画に加わった、留学を啓発する学生主体の情報提供イベントである（2016年10/24）。グロスぺ担当教員は、海外研究会の再興にあたって副顧問となり¹²、イベント開催に助言と協力を行った。

(2) 成果と課題

海外研究会は、鹿児島大学就職支援センター（当時）、かごしまCOCセンター（当時）とも協力関係を築き、平成28年度「鹿児島大学進取の精神チャレンジプログラム地方創生部門採択事業」として、株式会社下堂園の支援を得て、タイにて鹿児島茶を販売する海外インターンシップを企画実施し、活発に活動した。課題は、続けて学生主体の企画が出にくい現状である（海外研究会はコロナ禍を経て現在再び活動停止状態にある）。これらの事業を企画実施する指導力のある学生は継続的に存在しないのが現状で、外国人留学生と国内学生の協働プロジェクト企画も募集しているが応募はない。教職員の有限な人員環境の中、学生主体企画は毎年度義務と考えるのではなく、教員の協力提供を周知し、機会を捉えて必要に応じて助言・支援する待ちの姿勢が、現実的で可能な関与ではないかと思われる。

¹² 参考資料 南日本新聞記事



図8 海外研究会学生が作成したイベントポスター

IV. 活動全体の総括 – 成果と課題、今後の展望

グロスぺの活動の理念と目的（Ⅱ. 2. 目的）は、設置前から明確であった。理念は「大学国際化」の世界的な流れに沿うもので、「Ⅵ. 『内なる国際化』 (Internationalization at Home) における課外国際共修の意義」で後述する。目的は、鹿児島大学の現状を考えて設定したものである。この目的を具現化する活動の場が必要であったため、学習交流プラザの使用許可を願い出て大壁面の使用許可を得て以来、そこをランドマークとして、加除修正がありながら様々な活動（Ⅱ. 3. 活動の種類）を行って来た。それぞれの活動の目的は、グロスぺ全体の目的を具現化するものであり、各活動のまとめ及び成果と課題は、「Ⅲ. 各活動の総括」に記載した。

活動全体の成果として、第一に、提供した多くの課外活動取組を通して、量的に多数の学生の参加者を得た。当然全ての取組は質的に改善の余地があるが、それを認識した上で、結果として少数の学生参加に限定される質的に完璧な1つの取組の実施を目指すのではなく、あくまで明確な目的の下に多くの取組を並走し、多くの学生を巻き込む方針を意図的に選択した結果、裾野を広げて多数の学生にイベントを通して刺激を与え、グローバルコンピテンス育成につながる事柄に関心を高める機会が提供できたと言える。質的には、間接評価のアンケートを実施した取組もあり、良い評価が得られている（Ⅲ. 各活動の総括）。その結果に基づいてグロスぺ外国語等では改善を行ったが、未だ決して完璧ではない。課外活動として「最良の少数取組を」ではなく、規模と勢いと楽しさを優先してあえて「できる範囲の改善で多数取組を」の方針を取ったが、質的改善は、対応可能な範囲で常に継続が必要である。

活動全体の課題は、教職員の有限な人員環境と各取組の継続性である。当然ながら、実行したい企画や必要と思う改善が全てできるわけではない。また、数年間行った取組も、後日別の要因が生じて継続が不可能になった。具体的には、グロスぺ設置以来、グロスぺ担当職員の削減、コロナ禍等、個別取組の継続を阻む要因が生じた。また、大学の世界展開力強化事業の採択（2018-2022年度）等、課外活動であるグロスぺより優先順位が高い事業が出現し、教職員のエフォートがそれらに必要となった。このうち、対面活動や実渡航の往来停止などのコロナ禍による影響は、収束後には活動形態の進化とともに再開できる一時的な課題であり、各取組の継続性の担保には、やはり有限な人員環境が最大の課題である。

ゆえに、今後の展望は、理想的ではあるが、グローバルコンピテンス育成における課外国際共修活動等の意義を認める複数の教職員を探して、協力して運営する形がより良いのではないかと

考える。まず活動の理念と目的について共通基盤を構築することが必要で、グロスペの理念と目的をたたき台として、時間がかかって困難であるが、理念と目的について話し合い、すり合わせや修正を行って複数の教職員が共有できれば、それを基に取組の種類や優先順位の決定、既存の別の取組との協働、協力、有機的な繋がり等が可能になると思われる。その中にアセスメントも範疇に入れて話し合い、課題や方向性に共通理解が生まれれば、正課国際共修でも参照できる有意義な議論になるのではないだろうか。

V. 国際共修とオンライン国際協働学習の関連性

グロスペは、「P-SEG Interactive の活動の一つとして、全学生を対象に学習交流プラザを拠点に実施している課外国際共修（グロスペ外国語等）を含む活動」と説明した。ここで、改めて「国際共修」(Intercultural Collaborative Learning) に関して、本学が「大学の世界展開力強化事業～COIL 型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～」(2018-2022年度)で「オンライン国際協働学習」(Collaborative Online International Learning、以下 COIL) を推進していることから、「国際共修」と「COIL」両者を比較し、位置付けを整理したい。

末松 (2019 p.iii) は、国際共修を以下のように定義している。

言語や文化背景の異なる学習者同士が、意味ある交流 (meaningful interaction) を通して多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を想像する学習体験を指す。単に同じ教室や活動場所で時間を共にするのではなく、意見交換、グループワーク、プロジェクトなどの協働作業を通して、学習者が互いの物事へのアプローチ (考察・行動力) やコミュニケーションスタイルから学び合う。この知的交流の意義を振り返るメタ認知活動を、視野の拡大、異文化理解力の向上、批判的思考力の習得、自己効力感の増大などの自己成長につなげる正課内外活動を国際共修とする。

一方、COIL について池田 (2020 p.21, 23) は、ICT ツールを用いて、海外大学と国内大学の授業がペアを組み、それぞれのクラスの履修学生が混合したバーチャルの国際的な小グループを形成し、主体的な行動を前提として行うプロジェクト型の学習活動であると説明している。また、池田の所属する関西大学では、①「Classroom-to-Classroom タイプ」(海外大学の1つの授業と行う)と、②「Multilateral タイプ」(複数の海外大学と国内大学がカリキュラムを協働設計し、複数国・地域の学生による混合グループでプロジェクトを行う)に大別され、「Multilateral タイプ」の発展型として、多数の海外大学の学生と国内の学生が参加し、1大学が設計するカリキュラムで行う COIL もあるとしている。また、この2つの型を逸脱すると COIL ではない、ということではないと述べているが、現在のところ、COIL は正課を対象としていると考えられる。

上述の定義と説明を基に、図9に両者の関係を整理した。国際共修は、対面/オンライン、正課/課外も含めた協働学習で、正課のオンラインによる協働学習を範疇とする COIL を包含するものであると考えられる。

なお、グロスペの活動 (表1) のうち、国際共修にあてはまるものは、「グロスペ外国語」「外国語 Speaking Lunch Table」であると考えている。「グロスペ外国語」は、コロナ禍により現在は同

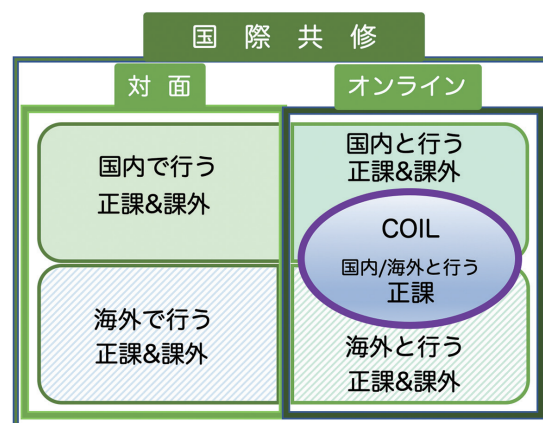


図9 国際共修と COIL の関係図

期型オンラインで実施している国内の課外国際共修である。この活動では、正課の国際共修で行うような意義を振り返るメタ認知活動を（中略）自己成長につなげる」（末松2019 p.iii）ための積極的な介入は行っていない。介入は最小限に留め、グロスペの目的「③主体的かつ自治的に、協働して学ぶ」ことを活動を通して体験してもらいたい、特に「課外」としてのゆるやかで「自治的な」学び、すなわち教職員は「契機」と「助言」を提供し、学生にはファシリテート能力や、リーダーシップ・フォロワーシップ能力等、臨機応変に体験の観察から自らの力で得るものを取って行ってほしい、という意図がある。現在コロナ禍で休止中の「外国語 Speaking Lunch Table」も、介入を最小限に留めた国内の対面課外国際共修である。活動の中に現在本学に「留学中」の外国人留学生を混じえ、本学から海外に留学して帰国した学生が自らの「留学前中後」の変化を後輩に伝えることで、長い期間で自らの成長を他者に還元することができることを意識化する、自治的な「グローバル人材育成郷中教育」を企図している。

これら課外国際共修の自治的学びの具体例として、筆者の担当するオンライン正課国際共修科目の本学と西オーストラリア大学の受講生が、課外で定期的にグループで話す取組を2020年に立ち上げた（図10）。課外国際共修に、新たな可能性が展開している。

UWA X 鹿大

Connect 4

We're bringing UWA and Kagoshima University students together with *Connect 4*, a regular and recurring online opportunity for students to meet and practise their English or Japanese.

Why groups of 4?
Two's company, three's a crowd, four's the perfect number! It's enough people to get a conversation going, but a small enough group that you can meaningfully connect and contribute.

What can I expect?
At every session, you will be placed into a group of 3 other UWA and 鹿大 students. We'll have some topics or activities to get you started, and a friendly facilitator will help your conversation run smoothly.

Halfway through the session, we'll swap the groups around so you have a chance to meet and mingle with a different set of people.

Join us to take your spoken language skills into your own hands and get to know some lovely people in a casual environment!

CURRENTLY SEEKING:
STUDENTS OF ALL ENGLISH SPEAKING LEVELS FROM 鹿大
[FILL IN OUR GOOGLE FORM!]

図10 学生の自治的な学び創出の例（学生が作成した活動説明広報資料）

VI. 「内なる国際化」(Internationalization at Home) における課外国際共修の意義

グロスペの活動理念は、「内なる国際化」(Internationalization at Home)にある。ここでは「内なる国際化」を概説し、国際共修の位置づけ、並びに課外国際共修であるグロスペの活動が「内なる国際化」を進めるために意味ある活動であることを確認する。

「内なる国際化」は、欧州国際教育協会 (European Association for International Education, 以下 EAIE) Forum1999年春号の「Internationalization at home-theory and praxis」で Nilsson が提起した問題 - 移動しない (海外留学等に参加しない) 大多数の学生に、いわゆるグローバルコンピテンス¹³を育成する教育をどのように提供するか等 - に端を発する。欧州では、エラスムプログラム開始後10年以上を経ても海外大学で学ぶ学生は10%以下であるという現状から、この問題提起は広く関心を集め、同年に EAIE に Special Interest Group が形成され、2000年に

¹³ 定義は P.2 注 4 参照。原文の意味を解釈して、筆者がこの言葉に換言した。

「内なる国際化 方針説明書」が刊行された (Crowther et al., 2000)。移動しない学生が大多数を占める環境は日本を含め欧州以外の国でも同様¹⁴で、問題は国際的に共有され、現在多くの教育機関で様々な方策が実行されている。

同書では「残りの90%の学生」に、キャンパスにいながらどのようにして国際的な世界をもたらすことができるのか¹⁵について、6名の専門家による様々な見解が示されており、大学を超えた政府等の法制的な枠組みや大学組織の運営に関する章、教育に関する章などがあるが、その中で「国際共修」は、教育に関して取り得る方策の一つとみなされ、国際共修に関連する以下のような記述がある。

外国人留学生との出会いを通じた国内キャンパスでの異文化間学習は、自己の文化的背景と価値観への個人的な感受性を高めることを目的とする。さらに、他の文化への肯定的な態度の育成や、異文化間コンテキストで効率的かつ適切に振る舞う行動スキルを教えることができる。(中略) 文化的多様性の実生活での体験は、最も影響力のある学習の型である。(中略) 異文化間の相互学習の手段としての内なる国際化では、文化的多様性は一般的な資源であり、潜在的に学習を富化するものと考えらるべきである (Otten 2000, pp.18-19)。

また、同書では、マルメ大学の国際化戦略計画を達成する7つの手段の中に、「授業の(負担ではなく)資源として、地元に移民してきた学生同様、客員研究者、交換留学生を活用する」「仮想の国際クラスを創るための重要な手段としてICTを活用する」が挙げられている (Nilsson 2000, p.24)。

「課外国際共修」の位置付けについては、その後EAIEは継続して「内なる国際化」を深化促進する活動をサポートし、現在当該ホームページでは「内なる国際化」を以下のように定義し¹⁶、正課・課外も明確に範疇としている。

内なる国際化は、『(前略) 国内の学習環境にいる学生のための正課・課外カリキュラムに、国際的で異文化間的な様相を意図的に統合すること (Beelen & Jones, 2015)』と定義されている。

また、同ホームページでは「内なる国際化」の鍵となる10の特徴を列挙しているが、その中から下に、正課国際共修に関するもの(2-4番)、課外国際共修に関するもの(1, 3, 4番)を列挙する(原文の番号とは異なる)。

1. 「内なる国際化」は、教育機関全体にわたるインフォーマルな課外カリキュラムでサポートされる(学習は正課の授業だけでなく、インフォーマルな活動(異文化間コミュニケーションワークショップ、学生による外国人留学生サポート(Buddy)プログラム、語学相互(タンデム)学習、サービラーニング活動や文化プログラム)が実質的な強みをもたらし、包括的な国際化達成に助けになる)。
2. 「内なる国際化」は、包摂的な学習、教育、アセスメントのために、授業で目的を持った文化的多様性を用いる(「内なる国際化」は、この観点で学習者志向であり、文化的多様性を

¹⁴ 派遣留学生数の割合は、日本は全体としては3%程度である(水松2019, p.53)。2020年までの達成目標は5%(国立大学協会教育・研究委員会2013, P2)

¹⁵ VI章の直接引用は、全て筆者の訳による。

¹⁶ EAIE Homepage <https://www.eaie.org/blog/internationalisation-at-home-practice.html>

授業資源として使用することは、多様な文化的背景を持つ国内学生と外国人留学生の経験と知識を組み入れる方法を探ることを含む)。

3. 「内なる国際化」は、地元社会の「異文化」に学生が関与する機会を創る(「内なる国際化」は、学生に「国際的」と同時に「異文化間的」なものを探ること、身近なグローバリゼーション、移民、文化的多様性の影響を認識することを動機づける。正課学習(コミュニティ調査プロジェクトなど)は、サービ斯拉ーニング、見学、コミュニティメンバーの授業参加と連携するかもしれない)。

4. 「内なる国際化」は、外国人留学生との意図的な関与を育成する(正課、課外双方の学習における教育活動及び学生に課す課題は、多様な背景を持つ学生(国内学生も外国人留学生も)間の交流と協働を活性化するために立案計画される。外国人留学生が存在するだけで、自然に「内なる国際化」が成功するというわけではない)。

筆者は、以上のように「大多数の移動しない学生」に対するグローバルコンピテンス育成の必要性を説き、身の回りの外国人留学生や地域における多文化要素を教育的資源と捉え、課外国際共修も教育手法の範疇とする「内なる国際化」の理念に賛同し、その具体的実行策としてグロスへの活動を企画実施してきた。

Ⅶ. 正課・課外国際共修の意義と可能性—内なる国際化と大学国際化の推進

正課・課外国際共修は、上述の通り、海外で学ぶことのない学生を含め、全学生にグローバルコンピテンスを育成するという「内なる国際化」において意義ある教育手段であり、さらに最大限の有効活用が望まれる。今後は対面に加えて、COIL や図10のような課外国際共修へのオンラインの活用にも、創造的で大きな展開の可能性が期待される。

一方、「内なる国際化」は、世界的な「大学国際化」の流れの中に位置づけられる。世界各地で1980年代から本格化している「大学国際化」は、今では大学全体の組織と教職員を取り込む「包括的国際化」(Comprehensive Internationalization: 総合的な大学改革。対象は、教育・研究・社会貢献、ガバナンス・マネジメント・人的財的資源のあらゆる範囲に及ぶ)へと洗練され、現在国際化に成功している大学では、教育・研究・社会貢献・ガバナンス等の広い領域において国際化マネジメントを進めているという(米澤2019, p.5, 24)。日本もスーパーグローバル大学創成支援事業等の政策で、同様の方向性を推進している。

このような「大学国際化」の中で捉えられる教育の国際化は、当然「海外で学ぶ」手法を教育の全てと捉えない。欧州で始まった「内なる国際化」は、米国でも同様の問題意識¹⁷で、2003年にアメリカ教育協会(ACE)が刊行した「Internationalizing the Campus A User's Guide」では、国際的学習・異文化間学習には大学教育の全段階で一貫性のある国際化したカリキュラムが必要だと述べ、各教育段階で考慮すべき点を詳述している(Green and Olson, 2003, p.57-68)。また、豪州では「Internationalization of the Curriculum in Action」プロジェクトでカリキュラムの国際化¹⁸が進められており、これは、あらゆる学術専門領域の教育に国際的・異文化的側面を取り入れることで、学生の異文化に対する感度を高めつつ、全体的な教育の質的向上を目指すという(米澤2019, p.15)。

高い多様性の中で相互に深く依存する社会・経済・自然環境システムに生きる我々には、切迫

¹⁷ 米国では、大学在学中に海外での学習を経験する学生は全体の10%、多くが1ヶ月以下である(Green and Olson 2003, p.57)

¹⁸ 「『国際的、文化間的、またグローバル的側面をカリキュラムの内容及び教育プログラムの学習成果、評価活動、教授手法、そして支援サービスに組み入れること』と定義される」(米澤2019, p.15)

した地球的課題の解決や、異文化にある他者と共によりよく生きる世界を求めて、適切に行動できるグローバルコンピテンスが求められる。このコンピテンスを、正課では共通教育の教養教育科目やグローバル教育科目だけで扱うものとせず、大学教育全体として、共通教育から専門科目や大学院科目まで一貫したカリキュラムの中で意識化し、各教育段階で育成できる/すべき能力を意図的に配置し、継続的な視点で計画的に育成するという上記の米国や豪州の動きの観点を共通認識とすることは、極度に困難だが、重要な課題だと言わざるを得ない。

参考文献

1. 池田佳子 (2020) 「ICT を活用し海外の学生と行う国際連携型の協働学習「COIL」の教育効果と課題」『大学教育と情報』JUICE Journal 2020年度 No.2
2. 鹿児島大学ホームページ <https://www.kagoshima-u.ac.jp/education/> 教育目標 .pdf 最終閲覧日2022年11月23日
3. 神田嘉延 (2009) 「薩摩の郷中教育研究の基本視点」『鹿児島大学稲盛アカデミー研究紀要』1号 pp.125-145
4. グローバルランゲージスペース (グロスぺ) ホームページ <https://gls.gic.kagoshima-u.ac.jp/concept/> 最終閲覧日2022年11月23日
5. 国際文化交流会 TEN ホームページ http://www.7b.biglobe.ne.jp/icea-ten853/html/j_what_ten.html 最終閲覧日2022年11月23日
6. 国立大学協会教育・研究委員会「国立大学における教育の国際化の更なる推進について」(2013)
7. 末松和子、秋庭裕子、米澤由香子編著 (第3章執筆者 水松巳奈)『国際共修－文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』(2019) 東信堂
8. 「伝えよう！鹿大生の海外体験」ホームページ <https://report.gic.kagoshima-u.ac.jp> 最終閲覧日2022年11月23日
9. Crowther, P., Joris, M., Otten, M., Nilsson, B., Teekens, H., Wächter, B. (2000) Internationalisation at Home A Position Paper, *the European Association for International Education*
10. EAIE Homepage <https://www.eaie.org/blog/internationalisation-at-home-practice.html> 最終閲覧日2022年12月8日
11. Green, M.F. and Olson, C. (2003) Internationalizing the Campus A User's Guide, *American Council on Education*
12. Nilsson, B (1999) Internationalization at home- Theory and praxis, *EAIE Forum*, p.12
13. OECD (2019) PISA 2018 Global Competence Framework, *PISA 2018 Assessment and Analytical Framework*, OECD Publishing.

謝辞


グロスぺ設置以来、歴代の特任職員 Matthew Watson 氏、津田佳織氏、岡村希代氏、永田あずさ氏、日高愛美氏に他業務の傍ら運営にご尽力頂きました。ここに深く感謝申し上げます。

参考資料：

南 日 本 新 聞 2016年(平成28年)1月9日 土曜日 **みなみネット** 22

The student press

海外渡航研究会 留学後押し、通訳も



留学を考えている学生たち（左側）の相談に応じる海外研究会のメンバー

鹿児島大学の海外研究会という新たな学生団体が勢いに乗って活動している。部長の門脇裕一郎さん(22)＝農学部生物環境学科4年＝と副部長の浦川直樹さん(23)＝同学部生物生産学科4年、鹿毛(かげ)健広さん(24)＝大学院理工学研究科1年＝の3人を中心に昨年9月に発足した。

「つながり」をテーマに学生の海外渡航・留学の支援、語学力を生かしたボランティア活動をしている。これから海外を目指す学生も部員になれるため、メンバーは半年足らずで急増し、現在92人に上る。

大学側も全面協力し、留学を仲介する山本雅史教授、畝田谷(うねだや)桂子教授、スティーブ・コーダ教授の3人が顧問・副顧問に就いた。県内の留学相談機関とも連携し、留学にまつわるさまざまな不安や疑問に対応。説明会などで100人近い学生の相談に応じた。研究会の支援を受け、今後留学予定の学生は30人を超えるという。

部員らは活動中に培う語学力を生かし、鹿児島国際交流財団が企画する通訳ボランティアなどにも参加している。他大学との合同企画も検討しており、活動の幅をさらに広げる。門脇部長らは「より多くの人の海外経験を後押ししたい。そのための人と人とのつながりの場を提供していく」と語る。

(法文学部人文学科4年・脇俊ノ介)

The Past, the Present, and the Future of the Global Language Space
-Extracurricular Intercultural Collaborative Learning and Internationalization at Home-

UNEDAYA Keiko

Keywords: Extracurricular Intercultural Collaborative Learning, Internationalization at Home, the Global Language Space, Global Language Space Foreign Language Exchange, Student Co-Learning for Cultivating Global Competence

In this paper, an introduction and summary of the goals and activities over the past 9 years of the Global Language Space including Extracurricular Intercultural Collaborative Learning (EICL) to all students of the university are given, and the results and problems are discussed. The major result was that we were able to broadly provide the opportunity to increase interest in matters concerning the development of global competence with a large number of students participating. Additionally, an outline of “Internationalization at Home (IaH)” which is the ideology behind EICL activities is provided, and the educational value of EICL is validated. Furthermore, the possibilities and value of Curricular and EICL as well as the relationship between IaH and the internationalization of the university are confirmed and considered.